

復興支援フォーラムニュース No. 99

(URL <http://www5a.biglobe.ne.jp/~tkonno/FK-forum.html>)

<事務連絡先> 今野順夫 (tkonno67@gmail.com)

相双地域におけるメンタルヘルスケアの取り組み

福島県立医科大学会津医療センター精神医学講座 特任教授

丹羽 真一

福島県は東日本大震災と引き続く原発事故という複合災害を体験して4年が経過し5年目を迎えた。史上かつてない体験だけに復興への道は険しいが、焦点を相双地域におけるメンタルヘルスを守る事業の現況をご報告し、復興・再生を加速する上でメンタルヘルスの問題が重要であることを述べ、あわせて今回の大災害を経験した精神保健医療福祉関係者の立場から、今後の大災害への備えについての提言をしたい。

I 相双の精神保健医療福祉システムの被災の状況

精神保健医療福祉の分野の被災について特筆すべきは太平洋岸中部・北部にあたる相双地域の原発事故の影響である。第一原発事故の直後、原発から30km圏内の精神科病床を持つ5病院も入院患者を他病院へ移送して一時閉鎖を余儀なくされた。800名を上回る患者が福島県内外の他院へと混乱のうちに移送された。その結果、北から小高赤坂病院、双葉厚生病院、双葉病院は2013年末に至るも閉鎖されたままである。同様に30km圏内にあった4作業所、7グループホームも一時閉鎖を余儀なくされ、うち1作業所は休止、1作業所は県内他地域へ移転、3グループホームは休業となっている。

II 震災後のこころの回復 — 福島の場合

災害の後のこころの復興については、良く知られた曲線がある。災害直後の昂揚したハネムーン期、その後続く低迷する幻滅期、そして回復期である。おのおのの持続期間は災害の大きさにより異なるであろう。阪神大震災後のこころの回復支援や、JR 福知山線脱線事故後の事故当事者・家族のこころの支援に当たってこられた村上典子先生の評価によれば、阪神淡路大震災後のこころの回復と東日本大震災後の回復とを比べた場合、東日本大震災後の回復は全体として阪神淡路の時より遅く、福島は岩手・宮城に比して遅い印象があるとまとめておられる。

福島の場合、原発事故の処理に時間がかかり、除染がなかなか進まないでいること、汚染水問題などで頻りに懸念事項が報道されることなど、回復の妨げになる出来事があまりにも多いせいで回復に時間がかかっているのであろう。

したがって、こころの復興・回復を考える場合に、生活を支える基盤全体の復興・回復を考える

ことが不可欠であるというわけである。被災者支援をトータルに考える視点が求められているのである。

福島県民が明るい未来へと進むことができるためには、県民に元気、希望、笑顔が必要である。県民が元気、希望、笑顔をもてるようになるためにはメンタルヘルスの回復と増進が大切であることは自明である。メンタルヘルスの回復と増進には、次のことが必要である。すなわち、ア) 福島こころのケアセンターの事業により、県内外の避難者を中心に広く支えること、イ) 県民健康管理センターの事業により、心に問題を抱える避難者を支えること、ウ) 避難のために転院を余儀なくされた精神科入院患者さんの希望による帰還をはかること（マッチング事業）、エ) 精神科医療保健福祉サービスが重大な打撃を受けた相双地区のサービス回復をすすめること、オ) 子どもの健康を育む事業による母と子どもの安全・安心を強めること、カ) 高齢者の体力と健康を回復・増進する事業により生活不活発病を減らすこと、キ) 介護サービスの向上により認知症患者さんの周辺症状（BPSD）を軽減すること、ク）以上を保証するマンパワーを確保すること、である。

Ⅲ NPO法人相双に新しい精神科医療保健福祉システムをつくる会（以下つくる会）の事業

NPO法人相双に新しい精神科医療保健福祉システムをつくる会（以下つくる会）は、東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所事故によって一度は失われた精神科医療保健福祉システムを新生する目的で平成23年11月に設立されたNPO法人である。つくる会は、精神障がい者や心のケアが必要な住民への訪問活動や相談支援、仮設住宅のサロン活動等を通じ、精神保健サービスを継続的に提供すると共に、当該地域の精神科医療・保健・福祉機関の連携を強化していくことを目的とし、精神障がい者アウトリーチ支援事業（震災対応型）、方部こころのケアセンター事業、それ以外の事業の主に3つの事業を柱として相双地区の住民を対象とした事業を展開している。

① NPO法人相双に新しい精神科医療保健福祉システムをつくる会の概要

つくる会は、福島県相馬市にある相馬広域こころのケアセンターなごみ（なごみ）を拠点に活動が行われている。同建物内の1Fには、同じ時期に立ち上がったメンタルクリニックなごみが同居しており、心のケアが必要かつ医療につなぐ必要があった場合、連携をとりながらすすめることができるのが利点となっている。東日本大震災直後から福島医大こころのケアチームが相馬市の保健センターを拠点にしていた相双地区の震災後のケア活動を前身とし、平成23年1月10日につくる会へ活動が引き継がれた。その後は、同チームで活動を共にしてきた相双保健福祉事務所の支援を受け4月から現在の形となっている。

なごみは、当初6名からのスタートであったが、現在は12名（男女各6名）のスタッフがおり、職種は、保健師、看護師、精神保健福祉士、臨床心理師、事務で構成される多職種チームである。その中には、被災者であると同時に支援者でもあるもの、震災時、福島県に居住していた職員やゆかりのある職員が大部分を占めるため、福島県に愛着があり、「震災前よりもいいものを作りたい」といった強い志で活動を行っている。また、震災時まで、保育士として保育園に働いていたスタッフもおり、後で述べる主に発達を見守る母子の遊びの場で重要な役割を担っている。

② 訪問活動

障がい者アウトリーチ推進事業（震災対応型）は、未治療者、治療中断者、引きこもり、長期入院後、震災によって症状があるものを対象とした訪問を行っている。アウトリーチの導入に関する依頼先は、来所相談やサロンで直接依頼されるケースの他、市町村保健センター、相談支援事業所、精神科病院、クリニック等様々である。ここ数か月では、つくる会が認知されてきたこともあり、ケアマネ事業所や社会福祉協議会からなど依頼先は多岐に渡っている。また、方部心のケアセンター事業では、被災した住民の要支援者の声掛けや健康相談、受診が必要な者への受診勧奨や他の支援機関への紹介などを中心とした活動を行っている。

全体としてアウトリーチ事業の対象者は増加傾向にあり、南相馬市からの依頼もここ数か月で上昇の傾向にある。また、治療中断者、震災が関連し症状がある、長期入院後症状が悪化しやすいケースが、大部分だが疾患別では統合失調症が主であったが、ここ数か月では認知症の対象者が増加している。アウトリーチ対象者から方部心のケアセンター事業の訪問対象者として引き継がれていく場合もあるが、訪問により症状は安定しているがデイケアや地域活動支援センターなど次のステップ必要としているケースや集団に対する不慣れを理由に社会への再適応が困難となっているケースも存在する。このような対象者へは、平成24年11月より、つくる会の新規事業として始めた日中の活動の場を提供する「なごみCLUB」が、従来の福祉支援では支援が困難であった者の受け皿となり居場所となっている。アウトリーチ事業は、現在も各関係機関からの需要が増加している。もともと約800床あった精神病院が未だに十分に機能していないことや、労働人口が減少し福祉施設職員の不足に起因した社会資源の利用できない高齢者の存在など様々な問題などが理由として考えられている。そのため、被災者をはじめとした障がい者のみならず地域の現状に合わせ、地域で問題となっているケースへ早期の介入を行い、地域で安定した暮らしを継続して行うなど個別性に配慮したきめ細かい対応が必要とされている。このような状況に対応していくために、職員のアウトリーチ技術の習得と技術の維持が課題と考えている。さらに、対象者の増加に伴い活動範囲も広がって来ており、社会資源の活用・地域との連携のあり方も今後の検討課題の一つである。

③ サロン活動

新地町（8ヶ所）、相馬市、南相馬市でサロン活動を行っている。平成24年4月からはスタッフも増え、月一回の健康教室やお手玉、セラバンド（ゴム製の運動器具）、折り紙、クリスマスパーティーなどのレクリエーションなど活動を充実させている。今後の課題は、仮設住宅を退去した方へのサロンの開催や送迎などをどのように行っていくかという点である。また、南相馬市からのサロン活動のニーズもあり、災害のステージや当センターのマンパワーに応じ適切に振り分けていく必要を感じており、雲雀ヶ丘病院の医師が設立したNPO法人「みんなのとなり組」と共同して仮設住宅へのサロン活動等を実施していくことも検討している。

④ 電話・来所相談

来所相談、電話相談もおこなっている。パンフレットやメディア、啓発活動により相談しやすい環境を作り行政や関連団体との連携を深めていくことを計画している。また、他県に避難して

いる住民からホームページをみて来所したケースもあり、きめ細やかな周知活動が望まれている。

⑤ 市町村事業への参加

依頼の大半は南相馬市からの依頼である。南相馬市の2ヶ所の保健センターで開催している、主に発達の経過観察が必要な遊びの場「なかよし広場」の提供の支援、子供の発達の相談会「すくすく相談会」、保育園や幼稚園の保育士の助言や児童のアセスメントを行う「巡回相談」を行っている。その他には、保健所からの依頼で、30歳以下の県職員を対象にしたメンタルヘルスをテーマとした講演依頼、自殺防止のゲートキーパー養成研修会の講師として2回を派遣している。これらの活動は、臨床心理士が主体となり行っている。

⑥ その他の事業

1) ちょっとここで一休みの会

つくる会で保育士の資格を保有している事務員と臨床心理士が中心となり、月2～3回、開催している。震災後、福島医大こころのケアチームが主体となって開始された時期は、放射能の不安で遊ぶ場所がないといった母子や障害があると疑われる参加者が主であったが、現在では、発達上の問題と思われる母子や相談や訪問対象者の参加者が増加している。遊びの場を提供する事で、発達の問題が疑われ経過を観察する例もある。発達に関しては経過を観察することが重要であり、気軽に参加できる雰囲気作りを大切にしている。その他、日常の悩みなどの相談も受け、放射能によって外で遊ぶことができない不安、障害児や成長発達が遅れている子供たちに遊びを通して保育士や心理等が見守り取り組みを行っている。支援を受けている主な団体は日本ヨーガ協会、臨床心理士の大学院生やチームジャパン（臨床心理士のボランティア）である。他団体からおもちゃの寄付の申し出があるなど関心が高い活動である。

2) なごみCLUB

先に説明したアウトリーチ事業の訪問対象者のための日中活動の場である。当初、訪問を拒否し、福祉事業所になじめなかった者が利用するなど成果を見せ始めている。特に、日常の集団生活の中で様々な活動を行っているため、人との関わりを必要とする者や社会技能（料理、買い物等）を獲得しようとしている者、家族との適切な距離をとるために日中の居場所が必要な者にとって有効な場となっている。

3) ホームページ、会報等の啓発活動

ホームページ (<http://soso-cocoro.jp/>) の定期的な更新の他、会報を通じてつくる会から情報を発信している。福島県相双地区の現状やスタッフ紹介などの活動をカラーで解説している。今後は、ホームページ及び会報の英訳化をすすめ、海外へも広く情報を発信していく予定である。

IV Ψ21Plan プランナー会議による「大災害から災害弱者と市民を守る被災地からの提言 ～ 精神科医療保健福祉サービス従事者の立場から～」

Ψ21Plan プランナー会議は、福島県の精神科医療保健福祉サービスのあり方を、21世紀の世界水準に相応しいものに改革してゆくために、県内の同サービス従事者が共有できる理念的目標をつくることを目的として平成14年2月に発足した有志の集まりである。シンポジウムなどでの検

討を重ねた上で、プランナー会議は福島を21世紀に相応しいものとするための「県民への提言」を18年3月に、「精神科医療従事者への提言」を21年3月にまとめて発表した。「精神科医療従事者への提言」の中では、起こりうる原発事故への対応についても提言していたが、23年3月の東京電力福島第一原発事故に際しては、その提言を活かすことができなかった。この苦い経験を踏まえて私たちプランナー会議では、東日本大震災と東京電力福島第一原発事故から学んだ教訓、精神科医療保健福祉の観点で大災害から災害弱者と市民を守る上での教訓を、県内外の精神科医療保健福祉サービス従事者と共有できるよう取りまとめた。

~~~~~  
【予告】第98回フォーラム 2015年8月20日（木）18:30～20:30

「福島県居住支援協議会 震災被災者の住宅再建支援と高齢者等の地域見守り」

報告者：斎藤 隆夫 氏（福島県居住支援協議会事務局長、

一般財団法人 福島建築安全機構専務理事）

会 場：福島市アクティブシニアセンター「AOZ（アオウゼ）」大活動室1

~~~~~  
【予告】第99回フォーラム 2015年9月3日（木）18:30～20:30

「仮設住宅の実態について」

報告者：鎌田 光利 氏（大玉村安達太良応急仮設住宅自治会長）

会 場：福島市アクティブシニアセンター「AOZ（アオウゼ）」大活動室1

~~~~~  
【予告】第100回フォーラム 2015年9月17日（木）18:30～20:30

「復興の現段階と今後の課題」（仮題）

報告者：真木 實彦 氏（福島大学名誉教授）

齊藤 紀 氏（医師）

会 場：福島市アクティブシニアセンター「AOZ（アオウゼ）」大活動室1

~~~~~  
(目標の第100回の開催に漕ぎ着けました。

本フォーラムは震災の年の2011年11月29日に第1回として開始して以来、4年近く、毎月2回の定例会を継続して参りました。

特に報告者の皆さまには、謝礼のみならず、交通費をも、お支払することなく、まさに自弁で協力していただき、感謝に堪えません。また参加していただいた、のべ600名以上の皆さんにも感謝しています。

市民的協働による復興を目指して、各界のご活躍の皆さんからの実態に基づくご報告は、復興を大きく支援するものと考えています。

今後は、定例的な開催は困難なため、随時、必要とされるテーマについて、開催していくことにしたいと思っています。

今後とも、皆さまのご協力をお願いします。)

第96回ふくしま復興支援フォーラムでのご意見等

7月22日、第96回ふくしま復興支援フォーラムを開催しました。

今回は、佐藤守氏（高山の原生林を守る会代表）から、「放射線汚染と樹園地および山岳生態系～山岳愛好家・果樹研究者として係った東京電力福島第一原発事故」について、報告をいただきました。

質疑応答の時間が足りず、途中で打ち切らざるを得なかったのですが、以下のご意見・感想などが、会場で提出されておりますので、参考にしてください。

~~~~~

★ 果樹試験場が様々な大学の協力のもとで、研究やデータの蓄積があったこと、それによって果樹の放射線量低減につながった事がよく分かりました。この過程がもっと一般の人に伝われば消費者安心につながるのではないかと思います。高山の原生林を守る会の活動にも参加してみたいと思いました。（K.Y）

★ あまり気にせず、庭や畑の柿や梅を食してきたが、こわい話を聞いてしまった。（Y.M）

★ 放射線の問題は難しく、どうしても一言ではいえません。でも原発一ヶ所で事故があっただけでも、これだけ大問題になっている原発は、すべて廃炉にして欲しいと思います。（K.W）

★ とても勉強になりました。（Y.I）

★ 他の演者もそうですが、質問の時間を充分にとってください。タイムキーパーが必要。演者が熱中。夢中になりがちです。（M.T）

★ 森の中のリター部分を歩いて楽しませていただいておりますが、この部分に放射能を多く含んでいるんですね。果樹の現状について、洗浄したり、木の皮をはいたりとありましたが、ここまでの過程にこれほどの努力がはらわれていたのですね。今後とも、美味しい果物を安心して食べられるよう期待します。研究者を引き付けられた努力も素晴らしかったです。おもしろい話ありがとうございました。（M.O）

★ 「震災直後から現地調査開始までの果樹研の動き」は、組織と個人の動き、テーマへの取りかかりが見えて、本題よりも面白く感じた。0ベースから4年を経て、日本のトップクラスの研究を行う姿勢に敬服。果樹の現場を知っているからできた対策～試行錯誤～、その苦労とネットワークの大事さを感じた。佐藤守氏の情熱が、多くの支援を生みだしたように思えた。（H.O）

★ 「除染」が、機械的に進められていることの、自然に対する粗暴ともいえる福島の現状の問題を再認識させられました。・・・でも原発の「罪深さ」が、放射能の問題の中で、軽くなっていくことの懸念もあります。ことあるごとに、「原発」そのものの問題にも触れていただきたいと思います。（K.O）

★ 福島の復興の象徴ともいえる、美味しい果物が、こうして食べることでできるようになったことは、大変な努力の賜物であったことがよく分かりました。（J.M）